

人生70年を虫と遊ぶ・分布調査の楽しさ面白さ

山陰むしの会 門脇 久志

1. 人との出会い、虫との出会い

私は、昆虫採集が趣味のアマチュアの虫キチである。高校時代の平田信夫、農業試験場時代の水戸野武夫両先生との出会いがきっかけで、昆虫採集にのめり込んだ。その後、隠岐支庁勤務で隠岐の昆虫に興味をもち、その採集品の同定を国立科学博物館に依頼したことから、同館の小林峯生先生の紹介で中根猛彦、朝比奈正二郎、白水隆、長谷川仁、大野正男先生はじめそれぞれの権威の諸先生のご指導が受けられ、それが私の虫人生の大きな支えとなった。

2. 隠岐の昆虫調査（1958年～現在）

隠岐の昆虫研究の歴史は古く、明治40年に三宅恒方博士はチョウ・ガ類179種を記録し、その後、神谷一男博士らが甲虫類160種を記録したほか地元研究者の報告があるが、本格的な調査研究は戦後である。

昭和33年に隠岐支庁に転勤し、暇な土曜日の午後や日曜日は大満寺山など近くの山々に採集に出掛けた。チョウやトンボをはじめ目につく虫を片っ端から採集したが種名が判らず、国立科学博物館を通じて専門の諸先生に同定をお願いして正確な種名の記録につとめた。

新種のおキチャイロコガネ、オキナガゴミムシなど、初記録のキリシマミドリシジミ、ムカシトンボ、オオカワトンボなど、再記録のルーミスシジミ、ネズミホソバ、オキナワリリチランなどが記録できた。また、山陰本土で普通でも隠岐では採集できないものも多く、昆虫分布を考える上で興味深い。

3. カワトンボ属の分布調査（1985年～1990年）

オオカワトンボは橙色翅型♂+淡橙色翅型♂+透明翅型♂+橙色翅型♀+透明翅型♀の5型、ニシカワトンボは橙色翅型♂+透明翅型♂+透明翅型♀の3型、ヒウラカワトンボは透明翅型♂+透明翅型♀の2型のみで、地域により組み合わせの異なった個体群が出現する。

昭和60年に、富山大学の鈴木邦雄博士からの山陰地方のカワトンボについて照会があり、送った隠岐を含む42ヶ所約300個体の標本で「島根県におけるカワトンボ属の地理的分布」がまとめられ、これを契機に島根県内の各地でカワトンボの調査を行った。しかし鈴木博士が提唱されていたオオカワトンボの中部群と中国群、ニシカワトンボの南海群とヒウラカワトンボの分布境界は県内では確認できなかった。

翌年、鳥取県内の各地でカワトンボの調査を行ったところ、倉吉市の天神川と鳥取市の千代川の間、鹿野町の鷲峰山付近に分布境界が存在することが判った。その後数年は調査を継続したがその結果は未発表である。この境界線がその後どうなっているか興味がある。

(近年DNAによるカワトンボ属の新たな分類が提唱されているが当時の呼称による)

4. ブタクサハムシの分布拡大調査（2001年～2005年）

ブタクサハムシは平成8年に千葉県で初発見された外来昆虫である。原産地はアメリカ、食草はブタクサ、オオブタクサ、オオオナモミなどで、侵入後爆発的分布を拡大した。

平成8年に農業総合研究センターの守屋誠一博士から島根県への侵入の有無の照会があり、調査を開始し米子市の日野川河川敷と津和野町の国道9号に隣接した荒地で発生を確認した。その後5カ年にわたり分布の拡大状況を調査するとともに成虫の越冬や冬期の活動状況を観察した。外来昆虫の分布拡大は興味ある課題だが、その機会は極めて稀で貴重な経験となった。

5. これからも夢を追って（伯耆大山の昆虫調査）（2004年～現在）

伯耆大山は古くから著名な昆虫生息地で、ダイセンナガゴミムシなど種名にダイセンを冠した昆虫も多い。しかし、近年チョウやカミキリムシなどで種類や個体数の減少が著しいとされているがその実態は明らかでない。生息状況を調査して過去の記録と比較し減少の実態を明らかにすることが今後の保護対策に役立つと考え、平成16年から同好の方々とともに環境省、森林管理署の許可をえて特別保護地域を含む大山の昆虫を調べている。

これからも体力の続くかぎり、農作業のかたわら夢を追って山野を歩き川を尋ねて、虫と遊び楽しむ生活を送りたいと願っている。